

## 第1群の座長をつとめて

木下幸子

(社会保険鳴和看護専門学校)

第1群4題は看護援助に関するものでありそれぞれ焦点は便秘・患者の不安・手術における剃毛方法・生活上の規制と看護上の問題についての演題であった。

演題1.「便秘・腹部膨満に対しての一援助」(垣内里美さん)は、健康障害からくる便秘・腹部膨満による苦痛を訴える患者14例に、苦痛緩和を目的に「ヨモギ+ハッカ湯」を使用した腰背部温罨法を行い、加熱保持効果と患者の反応をみた実験研究である。事前に4種類の液でプレテストを行い、温熱下降時間が遅く薬理効果作用のある「ヨモギ+ハッカ湯」を選択し、排便機序にそったアウエルバツハ神経叢、および骨盤神経分布部位である腰背部を湿布部位として温罨法を行ったところ、排便・排ガスが得られ安楽感・爽快感などの患者の反応がみられた。便秘や腹部膨満の苦痛緩和に「ヨモギ」を使う着想はユニークであり、14例の事例に包含されている一般性や個別性の中から共通性を引き出し、どのようなケースに適用できるか検討していくことが今後の課題であろう。

演題2.「白内障手術を受ける患者の不安について」(河原政子さん)は、視力障害を伴う白内障患者の術前の不安についての調査研究である。術後3日目の10名の患者に「術前オリエンテーションの理解の有無」「バルンカテテル挿入に対する不安・違和感・術中の疼痛の有無」「手術に対しての不安の有無」「麻酔手技による疼痛の有無」の4項目についてアンケート調査したところ、直接目に侵襲を加えられる手術そのものよりも、留置カテテルを挿入される事への不安が大きい事が分かっ

たという結果を得た。排泄の習慣は生後の小社会の中で身につけてきたものであり、内部環境の恒常性を保つための術中術後の排泄の方法の検討が必要であろう。

演題3.「膣式子宮摘出術における剃毛方法について」(森初子さん)は、45例を対象に「クリッパー法」と、従来の「カミソリ法」の剃毛の方法を比較検討した実験研究である。「クリッパー法」では剃毛所要時間は明らかに短く、消毒前後の菌のコロニー数も5%の危険率で有意に少なく、走査電子顕微鏡で観察した皮膚の荒廃もほとんど認められなかった。スライドで視覚的に訴え、充分納得させられた。

演題4.「予後不良の血液疾患患者の合併症による生活上の規制と看護上の問題について」(小藤幹恵さん)は、悪性血液疾患患者199名のうち14名の患者の入院カルテと看護記録から、対象の特性・生活上の規制・看護上の問題等を明らかにして、看護の方向性についての示唆を得た記述研究である。生活上の規制では食生活に関するもの、看護上の問題では病状そのものを取り上げたものが多かった。悪性血液疾患患者の治療効果の向上が目覚ましい中で、患者の高齢化や重要臓器障害の発生など変化しつつある状況をふまえ、生活規制からくる患者の苦痛の緩和にむけてこの結果をどう役立てていくかが今後の課題であろう。

以上の4題は、看護実践の身近な問題を素材に、より良い看護を求めた研究といえ、これらの結果が看護の質を向上させ、対象の福祉の改善へと結びつくことを願っている。